

カナリヤ賞

選考経過と選評

2020年

カナリヤ賞選考経過

一月一〇日応募を締め切った。応募総数は一二〇一作品。小学生は八四四作品、中学生は二九五作品、高校生は六二作品であった。北は北海道から南は沖縄まで、外国からの応募もあった。個人からだけでなく、学校単位での応募もあった。小中高部門それぞれ五人の選考委員が一月に渡って作品を読みこみ、二月十五日、選考委員会を行って授賞作品を決定した。

小学生の部

八四四篇の応募があつて、主催者はその反響の大きさにまず、喜ばしさを感じたことである。選考委員も大きな仕事となつて五名各々が居住まいを正し、精読を重ねた。多くの魅力ある作品に心奪われ、喜びを味わわせていただけるという特権に感謝しながら同時に、授賞作を選ばなければならぬという難題に向きあう。

金井直は「子供の詩というジャンル（種類）は

ない」と断定し、「自由に書いてよい」と言っている。（『子どもの詩』1974）選考会議の冒頭、作品の質を見ていこうと合議が整ったとき、この一節が思い出された。小学生だから、子供の書くものだからと読みに無用の手心を加えては作者に対して失礼にもなると、委員が皆考えている。それを互いに察している。

金井氏は「が、自分が思ったこと、見たままをそのまま書きさえすればよいというのではありません」と指摘を続けるが、当選考委員会においても当然そのことが読みの視点となつた。指摘を借り続ければ「おのずから考えなければならぬ方法があり」「それは一個の作品を作るときに考え出されるもの」となるが、これが選考過程で交わされた論議の基本を代弁してくれている。

無論金井氏がその「方法」について一冊を費やさなければならなかつたのと同様、それからほぼ半世紀を経ての本選考でも、押さえておかねばならぬことが多々あつた。子供が言葉をどのように経験しているのか、その途上での実感はどのよう

なものか、即ちそれらがどのように作品の姿として現れているのか、こちらがそれを感じ取る鋭敏を持つているか、等々。

「わたしの国語辞典」では主客が交替し同居する世界が展開される。「のびるねこ」は読む者がある種の逸脱へと誘う。「お兄ちゃんの声」では時間という真実が身近に接近する。「天国のばあちゃんへ」では現実を受け容れようとして、作者は言葉の力を借りることとなる。「サンタさんからもらったよ」は言葉が生まれる瞬間、その現場そのものであり、そこから伸びやかな想像が生まれている。

これらの不思議な世界はいずれも、言葉への無垢の信頼から生まれてきている、と言えるだろう。そしてそれは言葉への無意識裡の期待でもある。読む者を立ち止まらせずにはおかない作品の強さが、小さい詩人たちが日々磨いている言葉の、掛け替えない経験を教えてくれる。委員一同にとってこそ、掛け替えない詩的経験であった。

(加藤廣行)

中学生の部

中学部の応募総数は二百九十五篇であり、個人での応募のみならず、学校単位と思われる参加者も多くあった。

選考は初めに五人の委員がそれぞれに持ち寄った五篇ずつの作品を列記し、二人以上が重ねて候補としたものを選んだ。次に、各委員が次候補として選んだ五篇から、初めに選んだ候補作品と重なるものを選出した。

次に、複数の選考委員の支持を得た作品について、全委員で周到な議論を繰り返し、優れたものを選出した。また、複数の支持を得ていない作品についても更に討議し賞に値するものがないかを考察して行った。

最後に委員全員が同意する対象候補を二作選出し、議論の末、渡辺美愛さんの『おねがい』を大賞に選出するに至った。本作品は「別離」のうたです。家族、父親との別れでしょうか。日常会話の延長で綴られた作品の鮮度が高く生き生きとし

高校生の部

カナリヤ賞高校生部の応募作品の中から各選考委員が五篇ずつ選び、持ち寄ったところ、一人以上が選んだものが十二篇あった。まずは、それらを読み返すことから選考を始めた。

話し合いの結果、二人以上の選考委員が選んだものを中心に八篇を候補作とし、上位三篇を選ぶこととなった。各委員からの推挙の弁をもとに、さらに読み込み議論した結果、大野綾夏「取り残された思い出」、栄亜由夢「青」、田浦美来「残響」（敬称略・五十音順。以下同じ）が選ばれた。そのうちの作品をカナリヤ大賞（最優秀賞）とするかについて引き続き議論を重ねたが、それぞれに傾向が異なり、それぞれに長所があり、なかなか意見がまとまらなかった。そこで、この三篇をカナリヤ賞（優秀賞）以上とすることとし、カナリヤ賞候補残り二篇を選考するため、候補作を再度読み、議論を行った。それぞれの候補作について、魅力と問題点を話し合った結果、坂本琉瑠「見

ている。終連の決意を示すところが特に心を打つ。残してほしかった「ワガママ」、何時か作者も同じものを家族や自分にも見つけ微笑むかもしれません。

大賞と並んで、支持され惜しくも入選に止まったのが齋藤世理那さんの『空』です。爽やかで、透明感があり無理のない作りが好感を持てた。すつきりした仕上がりは終行の言葉通り「絶好調」のようです。

この他の入選作は、三摩美佳さんの『冬の自然が触れてくる』、杉田晃大さんの『僕が靴ひもを結ぶとき』、文野壮健さんの『うつつ』、であり、夫々胸溢れる魅力が零れ出す浮力の高い作品だった。

また、入選はできなかったものの、様々に光輝く星のような作品があった。

今回、多くの中学生詩人の作品を一堂に読めたことはとても幸せです。ご参加の皆さん、ありがとうございました。（花潜 幸）

えない陳列棚」、廣岡真衣「パレット」が選出された。引き続き、カナリヤ大賞を選ぶべく議論を重ね、大野綾夏「取り残された思い出」を大賞とすることとし、栄亜由夢「青」、坂本琉瑠「見えない陳列棚」、田浦美来「残響」、廣岡真衣「パレット」をカナリヤ賞とすることとした。（川井麻希）

「カナリヤ賞」を振り返って

「どうしてカナリヤなんですか？」と問う作品もあった。日本詩人クラブ初代会長の西条八十は二十五歳のときの作品で「唄を忘れたカナリヤは……。」と謳った。唄を忘れてしまった現代人、そして小中高校生に唄をさええずって欲しいという思いからこの名称にした。

「カナリヤ賞」を受賞した皆さん、また残念ながら、賞に至らなかった皆さん、この「カナリヤ賞」の目的は賞状をもらうことだけではない。自分で詩を書いてみることで今まで知らなかった別の世界を知ることができる。素晴らしい詩に触れ、自分で書いてみることで、心が豊かに

なる。これを機会に様々な詩に触れて、そして書き続けてこれからの人生に生かしてほしい。

この賞は当会にとって初めての試みだったが、一二〇一作品の応募は予想をはるかに超えた。個人で速達や書留で送ってくれた作品があった。学校でまとめて送ってくれた作品もあった。各学校の先生たちが意欲的に取り組んでいただいたことは大きい。みなさんの熱い思いがひしひしと伝わって来た。

広報サイトやマスコミの皆さんにも協力していただき、この賞がより広く知られることとなった。カナリヤ賞に関わっていただいたすべての方々に感謝するものである。

担当理事 曾我貢誠

選考委員

太田雅孝・岡野絵里子・小野ちとせ・加藤廣行・川井麻希・黒羽由紀子・齋藤貢・庄司進・武西良和・中原道夫・長尾雅樹・花潜幸・林哲也・宮本苑生・渡ひろこ（50音順）